

九世紀中葉・聖住寺と新羅王京人の西海岸進出

近藤 浩一(東京大学大学院博士課程)

はじめに

聖住寺は、唐から帰国した朗慧無染を開祖として、847年頃に韓国西海岸の忠南保寧に創建された禅宗寺院である。聖住寺の縁起ならびに無染の行跡については、この寺跡に残る崔致遠撰『万寿山聖住寺朗慧和尚白月葆光塔碑』（以下、『朗慧和尚碑』と記す）⁽¹⁾をはじめ、その発掘調査等で断片が数点確認されている金立之撰『聖住寺碑』や⁽²⁾、高麗中期ごろに編纂されたとみられる『崇巖山聖住寺事蹟』⁽³⁾などに詳細な記録がみられる。また発掘調査により、聖住寺の伽藍配置や数多くの出土遺物が確認され、文献学と考古学の両側面から復元することが可能な数少ない例といえる⁽⁴⁾。

とりわけ近年、これらの資料に対して本格的な検討を加えることで、無染の仏教（禅）思想はもとより、聖住寺の創建過程や経済的基盤を具体的に論及したものや、碑文の復元を試みたものまで、多様な研究成果が現れてきている⁽⁵⁾。その中でも、上の資料から聖住寺の檀越勢力を詳細に検討して、それらの人物の大半が真骨貴族や新羅王室など特権階層の王京人であることを特定した論稿等は注目される。しかしそうであるならば、王京人⁽⁶⁾が地理的にも慶州からはるか離れ、新羅国内でも辺境に属する西海岸部に聖住寺を創建した理由が疑問となる。

本稿では、この点を明らかにするために、9世紀中葉の新羅の国内外情勢を念頭に入れながら、聖住寺の創建と王京人の関係を具体的に検討する。特には、まず創建時の聖住寺の運営方法を考察して、それに関与した王京人の立場を明確にする。次いで寺院の位置する西海岸地域の状況に触れ、聖住寺が担った役割に迫る。それによって、上の問題はもちろん、広い意味で当時の新羅にみられる王京と地方（西海岸）の関係についても、新たに考えてみることができると思う。

1. 王京人と聖住寺の運営 - 金陽の租稻喜捨を中心に -

聖住寺の檀越勢力については、次の聖住寺関連資料から明らかである。

[資料 1]

迺北行、擬目選終焉之所、会王子昕懸車、為山中宰相、邂逅適願〈1〉、謂曰、師与吾俱祖龍樹之槃、（中略）、有一寺、在熊州坤隅、是吾祖臨海公受封之所、間、劫燼流栽、金田半灰〈2〉、匪慈哲、孰能興滅繼絶、可強為朽夫住持乎、大師答曰、有縁則住、大中初、始就居、且盼飾之、俄而、道大行、寺大成〈3〉、繇是、四遠問津輩、視千里猶跬步、其■不億、寔繁有徒、大師猶鍾待扣、而鏡忘罷、至者、靡不以慧炤導其目、法喜娛其腹、誘憧憧之躅、變蚩蚩之俗〈4〉、文聖大王聆其運為、莫非裨王化、甚■之、飛手教、優劣、且多大師答山相之四言、易寺榜為聖住、仍編録大興輪寺〈5〉、（中略）時憲安大王、与檀越季舒發韓魏昕、為南北相〈6〉、遙展撰齊礼、贄以茗醇、使無虛月、

[資料 2]

（前略）「・・・粥飯尤贍・・・淨財欲建仏殿又・・・伊浚庶兄施・・・助成功徳・・・」

(中略) 「・ ・ ・ 金殿歎無仏像頓捨家財 (?) ・ ・ ・ 租稻充入鑄像工価魏昕伊飡 ・ ・ ・ 奉鑄丈六世尊像 ・ ・ ・ 端巖睟容岐嶷青 ・ ・ ・ 盤紺絲之髮紅掌展瑞印之手 ・ ・ ・ 文紫磨金色臨宝座以益光玉 ・ ・ ・ 」 「・ ・ ・ 奉為魏昕伊飡 ・ ・ ・ 三層無垢淨石塔又擬立七祖師 ・ ・ ・ 之堂租稻已至於寺林衡運 ・ ・ ・ 伊飡之息奉 ・ ・ ・ 領色羅匹段并租一百碩 ・ ・ ・ 宜和夫人是允興伊飡 ・ ・ ・ 」 (後略)

すなわちこれにより、金昕、金陽、允徳、宜和夫人、文聖王、憲安王など (上に太線で表示) 多くの真骨貴族や新羅王室による、聖住寺の運営への関与を窺い知ることができる⁽⁷⁾。まず、このように碑文の中に真骨貴族や王族の人間の名前が数多く登場することから、聖住寺は創建後も地方で王京人と対立することなく、あくまでも彼等の公的権力のもとで組織的に運営されていたと考えられる。このことは、王京人が西海岸部に聖住寺を創建した目的や、寺院の性格とも深く関わる問題である。

ただし、既に李喜寛氏が指摘されたように、資料 1- (5) の記録によれば文聖王をはじめ王室が聖住寺と関係を結ぶのは、創建当初というよりはやや後のことであり、資料 1- (1) に無染が直接要請に赴いたとする金昕については、興徳王没後の王位継承争いに敗れ、既に王京を離れ山中で隠居していたことから、聖住寺は、当時侍中兼兵部令の職にあった金陽 (資料中には魏昕伊飡一金陽の字一と記す。) が莫大な費用を納め、檀越となることにより創建されたと考えてみてもよい⁽⁸⁾。『朗慧和尚碑』 (資料 1- (6)、資料 2) の中でただひとり彼を檀越と称することからも、金陽が創建時において最大の経済的な後ろ盾であったばかりか、彼のもとに集まった王京人の主導により聖住寺の運営がなされていたことが窺われる。ゆえに聖住寺の創建に関連する問題を解明するためには、何より金陽との関係から考察が必要となるだろう。

さらに資料 2 の『聖住寺碑』には、残片を集め復元したものであるため全体にわたる内容を把握することは困難であるが、金陽らが寺院創建の際に喜捨した物品等がある程度詳細に記述している⁽⁹⁾。『聖住寺碑』の建立年代は、梁承律氏が碑文の内容と撰者である金立入の翰林郎の経歴を詳細に検討することにより、850~853 年の間であるとみられている。したがってこの碑文の内容からは、創建当初の聖住寺の財政的基盤はもとより、寺院の運営形態の一端を垣間見ることができる。まず資料 2 一下線部によれば「租稻充入鑄像工価魏昕伊飡」とあることから、仏像を鑄造するのに必要な費用を、魏昕伊飡、すなわち金陽が租稻で充入したことが明らかである。その下部にも「□之堂租稻已至於寺林衡運」とあることから、多くの租稻が寺に運び込まれていたことを想定できる。その租稻の前には「□之堂」という語句が確認でき、□之堂 (梁承律氏は、これを影堂と推定している) を建立するのに使用された租稻であったとみられる。これに加えて資料 2 一下線部には、上の部分とも関連した内容であるが「金殿嘆無仏像頓捨家財」とあることから、喜捨した王京人の名前は定かでないものの、金殿 (仏殿のことであろう) に仏像が無いことを嘆き家財を喜捨して、仏像が鑄造された事実を窺い知ることができる。その下部にも「領色羅匹段并租一百碩・」とあることから、租稻のみならず多様な家財が、聖住寺に喜捨された様子が推察される。

このように聖住寺の仏像や金堂などの建物群は、金陽ら王京人が喜捨した租稻⁽¹⁰⁾をもとに鑄造・建立されていた。さらにいえば創建当初の聖住寺では、土地ではなく、租稻を中

心とする動産を財政的基盤にした寺院運営がなされていたといえる。ところでこの点は、新羅下代の多くの寺院にとって、王族や貴族たちが大規模の土地を寄進することでそれが寺院の重要な経済基盤となり、大土地経営に繋がったとする既往の研究成果⁽¹¹⁾と相反する。聖住寺においても、寺院の縁起を示す『朗慧和尚碑』（資料 1- (2)）を通して、聖住寺が「受封之所」や「金田」という、金昕や金陽の祖である金仁問（臨海公）以来の土地（食邑）⁽¹²⁾を所有していたことを伝えることから、そのことに反論の余地はない。しかしながら、創建時の状況を最も正確に著す『聖住寺碑』に、寺院の財源が動産所有により成り立っていたことを指し示す内容がみられることは、聖住寺がある意味で特殊な環境に置かれていたことを述べており、そのことは寺院の性格や役割とも大きく関係していた。

それならば創建期の聖住寺においては、土地よりも租稲をはじめとする動産の方が寺院の運営上、さらにいえば富を蓄積するのに何らかの都合のよい状況が存在したとみるべきではなかろうか。そこで考えられるのが、やはり聖住寺が位置した場所の地理的環境である。聖住寺が位置する現在の忠南保寧⁽¹³⁾は、西海岸に隣接しており統一新羅には藍浦（百濟時代には、寺浦と称す）と呼ばれ、地名からもわかるようにその場所には港が存在し、地理的にも早くから海上交通、とりわけ対唐交通の拠点のひとつとして発達してきた。こうしたことから、聖住寺の創建目的・運営形態は、交易活動と密接な関連があったものと推察される。交易活動において動産所有が土地よりも大きな役割を果たしたことはいうまでもないが、それらは、後述するように「海賊」勢力やこの地域で活動する富豪層らの安定的な確保においても不可欠であったと考えられる。日本中世史家の戸田芳実氏は、富豪層の所有形態の特色について、社会的には土地所有よりも大量の稲穀を中心とする動産所有に代表される点にあると評しているが⁽¹⁴⁾、聖住寺が存在した熊川州は、822年の金憲昌の乱でも明らかなように地方勢力の活動が盛んな地域であるため⁽¹⁵⁾、それら稲穀を分配することで彼らを従属させることも可能になったとみることもできる。

ここでは、最初に聖住寺と金陽の関係を指摘し、次に創建当初の聖住寺の財源は彼等が喜捨した租稲（動産）にあることを明らかにした。さらに、聖住寺が西海岸に隣接していたことを考慮すれば、そのような運営形態は交易活動と関連した可能性が高いことを指摘し得たと考える。

2. 張保臯の暗殺と王京人

聖住寺の創建時期は、『朗慧和尚碑』（資料 1- (3)）に、無染が寺に留まり始めたのが大中（847～859）初であることから（『崇巖山聖住寺事蹟』には、大中元年 11 月 11 日とする）、847 年ごろであることが明らかである。これまで論及されることはほとんどなかったが、聖住寺の創建時期については、今一度注目してみる必要がある。この 847 年という時期は、張保臯が暗殺された 841 年（846 年という説もある）と彼の海上活動の拠点である清海鎮が閉鎖された 851 年のちょうど中間にあたる。既往の研究でも広く指摘されるように、西南海岸地域は張保臯の交易活動の影響が程度の差はあれ及んだ地域であり⁽¹⁶⁾、張保臯は「海賊」勢力を取り締まり、交易活動を独占したものとみなされている。このことから、聖住寺の創建が張保臯の交易活動・暗殺事件と無関係であったとは到底考えられず、むしろ張保臯の暗殺を受けてのものであったと考える方が自然である⁽¹⁷⁾。

何度も言及してきたように、聖住寺は金陽を中心とする王京人が檀越となり莫大な私財

を納入することで創建された。金陽については、『三国史記』巻44 金陽伝などにその出自や略歴などの詳細な記録が残っており、既存の研究でも彼の政治的地位について比較的多く言及された⁽¹⁸⁾。『三国史記』の記事にしたがえば、金陽は、興徳王没後の王位継承争いで閔哀王に対し反旗を翻した金祐徴（後の文聖王）を助け、王位に就かせた功績等により蘇判兼倉部令、さらには侍中兼兵部令を授けられているが、まさに聖住寺が創建される847年には執事省侍中に昇任している⁽¹⁹⁾。これに加え金陽の略歴を通して注目されることは、やはり張保臯との関係であろう⁽²⁰⁾。上の史料によれば、王位継承争いで金陽は、清海鎮に入り金祐徴と合流してその地で兵力を整え、張保臯の軍隊をも引き連れて政府軍と戦ったことがわかる。また金陽は、興徳王代にも清海鎮と最も関係が深かった武州都督を歴任しており、清海鎮に対して深い理解があったばかりか、張保臯の事業に対する理解者であった可能性も少なくはないのである⁽²¹⁾。

張保臯の交易活動が金陽ら王京人たちに大きな影響を及ぼしていたことは、興徳王9年（834）に発布された教書の条文の中で、「異物之物奇」を尊び「土産之鄙野」を嫌うという風潮が指摘され、真骨貴族以下身分に応じて奢侈品の使用を禁じていることから推察できる⁽²²⁾。さらにこの教書の内容分析を通して、張保臯に代表される交易活動が新羅の伝統的な身分制（骨品制度）を解体する原動力にまでなっていたことが窺われる。こうした国内外情勢により金陽ら王京人は、張保臯の交易活動を中心とする経済力と軍事力に早い時期から関心を抱き、彼に接近していったものと推察される。しかしながら金陽らは、納妃問題を契機に、部下である武州都督閻長に命じ張保臯を暗殺することを選択する⁽²³⁾。このことを如何に考えるかは議論の分かれるところであろうが、張保臯の海上活動に対して理解が深い金陽が彼を暗殺したということは、これまで張保臯が独占的に行ってきた交易活動（国際交易）を、新たに金陽ら王京人のもとに再編成しようとする試みであったと理解することも可能ではないだろうか。

これに関連して、円仁の旅行記である『入唐求法巡礼行記』には、円仁が帰途についた847年に新羅の西南海岸の島嶼地域で第三宰相と内家の牧場や皇龍寺の荘園などを目撃したことから、当時の朝鮮半島の海岸部には王京人の経済的基盤が数多く存在していたことが予想される⁽²⁴⁾。すなわち西南海岸部に多くの経済的基盤をもつ王京人は⁽²⁵⁾、張保臯に委託せずとも独自の交易活動を展開できる能力を兼ね備え始めていた。張保臯の暗殺は、絶頂にあった国際的な交易活動を停止させたのではなく、金陽ら王京人に、張保臯を仲介せずとも独自に交易活動を行うことができる契機を与えたのである。このことは同様に、西南海岸地域の「海賊」勢力にとっても大きな画期であり、新たな動きをみせ始める⁽²⁶⁾。そうした中で王京人たちは、張保臯の暗殺後、海上活動者をいち早く確保して、張保臯が展開した国際交易を如何に継承するかにより多くの力を注いだものとみられる。

とりわけ金陽は、張保臯との10年以上にわたる交流の中で、彼が展開した交易活動を誰よりも熟知していた。周知のように張保臯の交易活動の特徴は、在唐新羅人との強い絆を背景に唐各地に赴き奢侈品を購入したことにあるが、その中心拠点は山東半島登州文登県に位置した赤山法花院であった。赤山法花院は、赤山浦に隣接して、唐の地方政府である平盧軍節度使の下で公的な役割を担い、多くの在唐新羅人たちにより管理され、交易活動の拠点でもあった⁽²⁷⁾。『巡礼行記』によれば、円仁が「寺名赤山法花院本張宝高初所建也」⁽²⁸⁾「大使本願之地」⁽²⁹⁾と評していることから、張保臯は、820年前後に登州に進出して

以後、新羅に帰国し清海鎮を設置してからも、赤山法花院に莫大な財貨を喜捨していることが窺われる。さらに『巡礼行記』から、839年6月下旬に張保臯が送った交関船2隻が赤山浦に到着し、大唐売物使崔兵馬使(名前は暈であろう)が赤山法花院を訪問したのち、その交関船は登州乳山浦と揚州などを往来していた事実を確認できる⁽³⁰⁾。このように張保臯は、私財を喜捨し檀越としての地位を得て赤山法花院の運営に関与することで、山東半島を中心に唐の各地域で交易活動を有利に展開することができたのである。また張保臯は、清海鎮設置後に莞島付近の長佐里に法華寺を創建したともいわれている⁽³¹⁾。

勿論、王京に居住する有力真骨貴族の金陽と、地方に拠点を持ち海島人と称せられた張保臯という、身分の違いもあり、両者を比較対象とするのに必ずしも適切であるとはいえない。だが、交易活動という側面から考えてみれば、9世紀中葉の新羅では、中国や日本に向けて開かれた様々な航路をもつ張保臯のような人物が、最先端のスポットにあったといえる⁽³²⁾。反対に王京人は、彼等からの情報収集に努めるとともにそれらの掌握に多くの力を費やしたものと推察される。それゆえ張保臯が展開した交易活動の方法が、王京人に影響を与えることも当然あったとみて相違ない。推測に推測を重ねるならば、聖住寺は、金陽らが赤山法花院等をモデルに創建したとみることも可能なのである。いずれにしても王京人たちは、張保臯の暗殺を契機に、これまで彼を仲介に行われた国際交易を新たに自身の管理下に置くため、その活動拠点を確保するのに努めたことが予想される。

ところでこれに関連して、南海岸の全羅南道長興郡に所在した宝林寺も、9世紀中葉(張保臯の暗殺後)に海岸部に創建された王京人と関係深い寺院として、聖住寺の特徴とも共通点が多い。『宝林寺普照禪師彰聖碑』⁽³³⁾によれば、860年に憲安王の命を受けて副守金彦卿が私財で鉄2500斤を買い盧舎那仏一体を鑄造し、さらに真骨貴族の中でも特に膨大な経済的基盤を所有する金入宅のひとつである望水宅・里南宅が租穀2000斗と金169分を喜捨したことを窺い知られる。李基東氏が指摘するように租穀2000斗は田1333結に該当する量であることから⁽³⁴⁾、創建期の宝林寺も、まさに王京人が施入した莫大な動産所有により運営されていたとみてよい。特に金は、国際交易との関連性までも想起させるものである⁽³⁵⁾。西海岸と南海岸で若干の違いはあるものの、宝林寺も、王京人のもとで海上活動者を編成して交易活動に関与した寺院であったと推定される。

論点がやや多岐にわたったが、ここでは金陽ら王京人が聖住寺を創建した背景に、張保臯の暗殺と密接な関連性が存在したことを明らかにした。金陽ら王京人は、張保臯の交易活動を継承すべくその活動拠点を確保するために、対唐交通の拠点の役割を担い得る西海岸の忠南保寧に聖住寺を創建したと考えたい。言い換えれば、聖住寺は、張保臯の暗殺後にみられる対唐交易の占有を見据えた、王京人の西海岸地域進出と表裏の関係にあったことが指摘されよう。

3. 聖住寺と対唐交易

1) 朗慧無染の活動と対唐交易

前述してきたように、聖住寺は、張保臯暗殺後にはじまる金陽ら王京人の西海岸進出、さらには交易活動と密接な関連があることが明らかになったと考えるが、国際交易との関連を暗示する次のような資料も存在する。まず『崇巖山聖住寺事蹟』の中には、聖住寺の規模を具体的に伝える記録がみられるが⁽³⁶⁾、

[資料 3]

改創選法堂五層重閣、三千仏殿九間、海莊殿九間、大雄宝殿五間、定光如来殿五間、内僧堂九間、極樂殿三間、(中略)、十王殿七間、梅⁽³⁷⁾檀林九間、香積殿十間、住室七間、井閣三閣、鍾閣東行廊十五間、西行廊十五間、東西南北間各三間・・・

その聖住寺の建物の中で「・・・梅檀林九間・・・」という部分は注目される。梅檀林九間の意味は、梅檀を置いたところが9間であるか、梅檀で造られた建物が9間であるのか判断が付き難いところではあるが、いずれにしても聖住寺には相当量の梅檀が存在しており、それらはどこからか持ち込まれたものであることは確実である。梅檀は、ジャワ島やスマトラ島など東南アジア方面で生産される有香木材であり、紫檀とよばれる奢侈品は、興徳王代に真骨貴族以下その使用が禁止される舶来品である⁽³⁸⁾。

そこでこれらをどのように入手したかが問題となるが、やはり張保臯が唐各地で行った国際交易との関連性が想起されよう。前述したように、それ以前に新羅国内で普及していた舶来の奢侈品は、張保臯が揚州などでアラビア・ペルシャ・占婆商人などを通して購入してきた物品であろうと考えられている⁽³⁹⁾。したがって上の資料に登場する梅檀林九間も、張保臯の暗殺後であれ、対唐交易を通じ聖住寺に持ち込まれた品物であるとみてほぼ間違いない。

さらに聖住寺跡(9世紀中葉以後)の発掘調査では、聖住寺創建期の伽藍跡から唐代後期の陶磁器の特徴である、底部を削りだす形式の中のひとつである‘蛇の目高台’の青磁・白磁盃など高級器皿が数多く確認されている⁽⁴⁰⁾。調査報告書によれば、ここで出土された蛇の目高台は製作技術にしたがい、内底圓刻がない越州窯産・定窯または邢窯産など中国製の‘蛇の目高台’(陶磁器)、内底圓刻がないものの国内(朝鮮半島)で生産された中国系の‘蛇の目高台’、そして内底圓刻がある国内産に区分できるという⁽⁴¹⁾。唐から持ち込まれた陶磁器が聖住寺で数多く出土した事実は、聖住寺が対唐交易の中心地として機能していたことを物語っているといえよう。越州窯系の青磁や唐様式の白磁は、唐商人が往来したことで知られる鴻臚館跡などの発掘調査で明らかのように、日本列島にも9世紀半ばごろから大量に持ち込まれており、それらは博多津から瀬戸内海を経て平安京にまで運搬されていたとみなされている⁽⁴²⁾。加えて、国産の‘蛇の目高台’が聖住寺で出土することは、ここからほど近いところにそれらを焼く窯が存在したことを暗示しており、唐人の工人が往来していた可能性も少なくないだろう。

上のように聖住寺と対唐交易の関連性を指摘し得るならば、聖住寺にもそれに見合った活動を行うのに適した人材が必要となる。簡単にいえば、張保臯のように唐情勢に精通し、在唐新羅人はもとより平盧軍節度使のような唐の地方政府と繋がりをもった人物が聖住寺にも存在したはずである。その一端を担ったのが、まさに寺院の開祖である朗慧無染ではないかと考えられる。『朗慧和尚碑』にしたがえば、無染は812年の13歳の時に出家し、822年に22歳で新羅唐恩浦から遣唐使船に乗り込み唐に渡り、約25年の間唐各地を訪れ845年唐武宗の廢仏政策の際に帰国した。唐国内での行跡については明らかでない点が多いが、初期には長安の終南山にある華嚴宗の至相寺に入寺し、そこで禅宗に目覚め、寺を出て馬祖道一の弟子である麻谷宝燄のもとで禅門を学んだとある⁽⁴³⁾。曹凡煥氏の指摘によれば、中国に留学した禅僧たちの中で滞在期間が15年を過ぎる者はほとんどなく、25年

という年月は極めて例外であった⁽⁴⁴⁾。ゆえに無染は、唐国内で「東方大菩薩」⁽⁴⁵⁾という評価を受けており、そこで一定の地位を築いたばかりか唐情勢についても他の誰よりも精通していたといえる。金陽が他の僧侶ではなく無染を受け入れ開祖とした理由も、無染の長期間にわたる在唐経験を見込んでのものであったと推測される。

さらに、聖住寺（無染）が対唐交易に積極的に関与していたことは、後代の資料であり信憑性も定かではないものの、1990年に山東半島登州文登県の崑崙山付近で発見された清末光緒13年（1887）8月建立の「重修無染院記」と刻まれた石碑と、その来歴を記した『登州府志』の「大唐牟平県崑崙山無染院碑」を通して窺い知られる⁽⁴⁶⁾。この中には、平盧軍節度使王師範（891～905）など唐役人の名前とともに鶏林（新羅）人である金清押衙の名前を発見できるが、「崑崙山無染院碑」は本来901年（昭宗の光化4年）に金清押衙の出費により建立されたものとする⁽⁴⁷⁾。この新羅押衙金清は、交易に従事しながら富を蓄積した人物であるとみられるが、この資料からは、聖住寺開祖の朗慧無染と同名である無染院が登州に存在しており、無染院が押衙金清という在唐（？）新羅人により管理・信仰されていた事実を確認できる⁽⁴⁸⁾。このことは、山東半島と新羅西海岸部が禪宗（無染）という共通した宗教により結ばれていたことを想起させ⁽⁴⁹⁾、また山東半島と新羅藍浦の聖住寺の間で定期的な交流がなされていたことを示している。前述したように張保臯が活動した時期の山東半島では、赤山法花院を中心に在唐新羅人社会が形成されており、張保臯は彼らとの関係を通じて交易活動を行っていた。その後、在唐新羅人社会がどのような変遷を遂げるかは定かではないが、新羅国内の王京人たちは、張保臯暗殺後も彼の交易活動のネットワーク（彼の遺業）を可能な限り継承したものと考えるのが妥当である。

以上のことから、聖住寺は張保臯暗殺後の対唐交易を担う重要拠点であることがより具体的になった。この場所には、後述するように唐から往来してきた人々も含めより多様な人間が集まっていたが、金陽ら王京人が聖住寺を創建し西海岸に進出しようとしたのも、彼らが欲する交易品をいち早く購入するためであったと考えられる⁽⁵⁰⁾。例えば同じ時期の日本でも『安祥寺伽藍縁起資財帳』によれば、安祥寺の僧恵運は大宰府の筑前観世音寺で新羅商客から銅鏡・暈子などの仏具を購入していることがわかるが、安祥寺の創建と運営には藤原良相・伴善男ら有力貴族が深く関与していたとされる⁽⁵¹⁾。すなわち寺院を介した交易活動は、赤山法花院や観世音寺などを通して広く知られるように、当時の東アジア世界で頻繁にみられる形態であり、寺院と僧侶と交易の関連性は貴族層の欲する交易品の問題とも関連していたのである⁽⁵²⁾。

2) 聖住寺と「海賊」勢力の再編

王京人が張保臯暗殺後に対唐交易を主導的に展開するためには、実際に交易活動を行う海上活動者を確保し、それらを新たに編成する作業が必須であった。張保臯暗殺の要因は、王京人と対立したのみにとどまらず、武州地域を中心とした西南海岸地域の「海賊」勢力の反感によるものであるといわれるように⁽⁵³⁾、王京人にとってはその地域に多数存在した「海賊」勢力をいかに取り締まるかが目下の課題であった。反対に「海賊」勢力も、張保臯の暗殺で既存の海上秩序が崩れたことにより、利益を得るのに適した新たな活動方法を模索したとみられ、聖住寺の創建はまさに「海賊」勢力にも大きな影響を及ぼしたとみて相違ない。そうした状況下において、開祖の無染の活動（布教活動）は、唐とのつながり

を構築しただけでなく、「海賊」勢力を聖住寺のもとに編成するのに大きな役割を果たしたと考えられる。

例えば『朗慧和尚碑』（資料1-（4））の記録によれば、無染の活動が寺を発展させたとするが、具体的には無染の道を求め多くの人々が集まり、仏法によって乱暴な習俗（崑崙之俗）をもつ人々の心を変化させたことがわかる。さらにこのことを一層具体的に述べているのが、『崇巖山聖住寺事蹟』にみられる次の部分である。

[資料 4]

藍浦群賊輻湊、請益和尚猶鍾待叩、似鏡現形、以慧炤導其目、法喜娛其腹、由是、群賊遷善改過出家得道者百余人、文聖大王頻降神筆曰、熊州是海隅辺塞、人性凶傲、朕篤畏不服、禪師既為 法雄秀道德堪任、人自行善、朕喜、充抱請禪道為国鎮坐、茶香信物四時連還、因勅下曰、烏合寺禪師所居誠可尊儼、宜為寺額勅、

この中には賊という表現が頻繁に登場するが、初めに藍浦群賊とみられることから、藍浦という港に居住する賊の群れ、すなわち「海賊」と考えてよかろう⁽⁵⁴⁾。このことは、その下部に「熊州是海隅辺塞人性凶傲」とみられることから明らかである。ここに記された内容を簡単に要約すれば、“この地域には乱暴で命に従わない藍浦賊が存在したが、無染が賊たちの質問に答え法の喜びを享受することで、群賊らは改過遷善するようになり、出家して仏道に励んだものが百余名であった”という。すなわち、無染は百余名の「海賊」を出家させ、聖住寺のもとに彼らを取り込んでいることがわかる。

これを契機に、これまで海賊行為を働くなど敵対的行動を取っていた「海賊」勢力は、新たに聖住寺のもとに組織化された。さらに聖住寺が金陽ら王京人のもとで運営されていたことを念頭に置けば、王京人のもとに「海賊」が再編されたとみることもできる。そこで注目されるのが、租稲を中心とする動産を基盤に聖住寺が運営されていた事実である。

「海賊」勢力が租稲の獲得に努めていたことは、『日本後紀』弘仁2年（811）8月甲戌条にみられる新羅人が県の穀物を運搬する際に海で盗賊に襲われたという記事をはじめ、彼らが海賊行為を働き穀物など年貢を略奪した事例が極めて多いことから窺われる⁽⁵⁵⁾。したがって金陽ら王京人が喜捨した租稲などは、「海賊」たちに再分配されることで、彼らの確保を可能にしたとみて相違ない。金陽らが租稲をはじめ多様な家財を聖住寺に喜捨した主たる目的は、聖住寺を通して交易活動を行う「海賊」勢力を再編することにあった。

こうした「海賊」勢力は、聖住寺等から入手した租稲などの動産を所有し唐各地に出かけて交易活動を行ったとみられる。また西海岸沿岸部の交易活動拠点には、唐商人も頻繁に往来した様子が窺われる。『新增東国輿地勝覧』19・忠清道沔川郡・人物ト智謙⁽⁵⁶⁾によれば、聖住寺が位置する藍浦から比較的近距离にある樸城郡（沔川郡のこと）には、高麗の建国に功臣があったト智謙家門がいたが、彼の先祖であるト学士は唐から新羅にやってきて沔川郡に居住しながら海賊を打ち払い百姓たちを集め保護したという。ト智謙の先祖は、唐と新羅を往来した海上交易に従事しながら相当な海軍力と経済力を築き、樸城郡地方で有力な豪族に成長したといえる⁽⁵⁷⁾。ゆえに聖住寺に集まった「海賊」の中にも、唐人が含まれていた可能性が高い。山内晋次氏は、同時代史料ではないが『扶桑略記』の「但遺賊中有最敏將軍三人就中有大唐一人」という記事を根拠にして、9世紀末の新羅では新羅人と唐人が交じりあって賊団を形成したと説くが⁽⁵⁸⁾、史料にみられる組織化された賊団

が形成されるにいたる背景には、聖住寺や宝林寺など王京人から莫大な経済的支援を受けた寺院や地方機関からの保護があったものと推察される。

これに関連して田中史生氏は、貞観 11 年 (869) の新羅海賊事件に関わる一連の史料を分析することで、新羅海賊 (交易活動者) の構成者の性格を論及する。田中氏は、それらの事件に関与した者の中に新羅人の僧侶や造瓦の技術者が含まれることや、その背後に新羅王の存在までも暗示する記録がみられることに注目し、新羅「海賊」が公的機関や大宰府官人、新羅王という政治的権力体の構成者と不可分の関係にあったことを指摘する⁽⁵⁹⁾。

また権恵永氏は、博多津や対馬で上のような事件が起きたのは、張保臯の暗殺からこの時期にかけて新羅「海賊」が大規模化・組織化されたことを証明してくれるとする⁽⁶⁰⁾。結論からいえば上の事件に関与した新羅海賊は、聖住寺や宝林寺 (日本の場合、地理的なことを考えれば宝林寺である可能性が高い) などに再編された「海賊」勢力であったとみて相違ない。聖住寺や宝林寺の末端につらなる「海賊」勢力であるならば、間接的であれその背後に新羅王や真骨貴族など公的機関の存在が窺われるのも、ある意味当然なことである。

以上から、聖住寺の創建が張保臯暗殺後の「海賊」勢力の再編に大きな役割を果たしたことが明らかになったが、その背景には、金陽ら王京人が対唐交易の占有を求めて実施した西海岸進出と密接な関連があった。さらに資料 1- (5) や資料 4 には、文聖王は無染が賊たちを改善し出家させたという噂を聞くや、使者を送り寺の名前 (寺傍) を聖住に変え大興輪寺に編録させたという趣旨の内容がみられる⁽⁶¹⁾。つまりこの記載から、文聖王 (新羅王) が聖住寺の運営に関与する目的は「海賊」勢力の確保にあったことが鮮明に窺われ、聖住寺と「海賊」問題の関係を物語る。また、最初に言及した通り聖住寺の創建並びにその後数年間は、王京人の中でも真骨貴族が檀越勢力として寺院の運営に従事していたが、これを契機に新羅国王が直接それに介入し始めることがわかる。加えて『朗慧和尚碑』には、文聖王から真聖女王にいたる代々の新羅国王がこれまで以上に多様なものを聖住寺に喜捨するとともに、無染の教えを尊重し彼を国師に任命し、寺院の放生場の境界を標示し題額を与えるなど寺院の運営に積極的に関与する様子を詳述する⁽⁶²⁾。いずれにしても、当時の新羅王と真骨貴族の関係など今後詳細に検討しなければならない問題は多いが、国王までもが創建後の比較的早い時期からその運営に直接関与すべく努力したことは、創建後の聖住寺がこの地域で担った役割の大きさを物語る。

むすび

本稿では、聖住寺の創建及び運営の意義について、その立地場所、檀越勢力、財政的基盤、創建年代はもとより、張保臯暗殺など当時の新羅の国内外情勢に注目することで、王京人との関係から検討してきた。特には、張保臯暗殺後の 847 年に金陽ら王京人が西海岸付近に聖住寺を創建した背景を明確にできたと思う。本文で述べた内容を簡単に要約することで、むすびに代えたい。

まず、聖住寺は、侍中金陽を中心として彼のもとに集まった王京人が莫大な費用を納め、檀越となることで創建された。聖住寺は王京人の主導下に運営されたのであるが、その財政的基盤は土地よりも彼等が喜捨した租稲を中心とする動産にあった。ゆえに寺院の運営上、動産の方が富を蓄積するのに都合のよい状況が存在したとみられるが、聖住寺の位置

する西海岸地域の地理的環境を考慮すれば、まさに交易活動との関係が想起される。

また、聖住寺の創建時期である 847 年は、張保皐の暗殺と密接な関連があった。とりわけ聖住寺の創建に尽力した金陽は、張保皐と親交が深いばかりか、彼の暗殺にも直接関与したのである。金陽ら王京人は、張保皐により独占された交易活動（国際交易）を新たに自身の管理下に再編すべく、その活動拠点を確保する意味から西海岸地域に聖住寺を創建したものとみられる。

このように聖住寺の創建は、張保皐暗殺後に促進される王京人の対唐交易を見据えた西海岸進出と表裏の関係にあった。聖住寺の建物の中に梅檀が存在したり、伽藍跡から唐代後期の陶磁器が数多く確認されたりするのに加えて、朗慧無染のような唐情勢に精通した人物が寺院の開祖である点は、聖住寺が対唐交易の拠点であったことを具体的に知らせる。また聖住寺（無染の活動）は、何より「海賊」勢力の編成に寄与したことが確認されている。したがって王京人が租稲等の家財を聖住寺に喜捨したのも、「海賊」たちにそれらを再分配することで、彼等を確保して交易活動に従事するためであったと推察される。

こうしたことは、聖住寺がこの地域で担った役割の大きさを物語るが、以上のように金陽ら王京人が積極的に関与したとすれば、王京と聖住寺の間に頻繁な交流が存在したものと想定される。つまり聖住寺の創建は、当時の慶州と西海岸地域の交通を促進させたのである。『朗慧和尚碑』の中にも、当時の新羅の地域間交通を伝える記載がいくつか存在するが、これらの問題は今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 本稿での『朗慧和尚碑』の原文及び注釈は、李佑成校訳『新羅四山碑銘』（亜細亜文化社、1995）の該当部分に従った。それ以外にも、黄寿永編『韓国金石文総覧（上）』（亜細亜文化社、1976）、韓国古代社会研究所編『訳註韓国古代金石文（第3巻）』（駕洛国史蹟開発研究院、1992）等が参照される。
- (2) 本稿での『聖住寺碑』の原文及びその復元は、梁承律「金立之の「聖住寺碑」」（『古代研究』6、1998）に従った。それ以外にも、注1で引用した文献等が参照される。
- (3) 本稿での『崇巖山聖住寺事蹟』の原文及び注釈は、黄寿永「（資料）崇巖山聖住寺事蹟」（『考古美術』9-9、1968）に従った。
- (4) 忠南大学校博物館『聖住寺』（忠南大学校博物館叢書第17輯、1998）。ところで、この聖住寺の跡地には、もともと百済の法王（または武王）が創建し、新羅統一後は金仁問の一門により継承された烏含寺という名称の寺刹が存在した。しかしながら烏含寺は、その後何らかの事情により廃寺になっており、調査報告書でも、9世紀中葉（聖住寺の創建以後）に出土遺構（伽藍配置）や土器・陶磁器などの出土遺物に大きな変化がみられるとする。したがって本稿では、烏含寺と聖住寺を連続した存在とは考えず、無染を開祖として創建された聖住寺のみを考察の対象とする。
- (5) 近年の代表的な研究成果は、次のようである。曹凡煥『新羅禪宗研究—朗慧無染と聖住山門を中心に—』（一朝閣、2001）及び、梁承律「金立之の「聖住寺碑」」、同「聖住山門関連史料の検討」（『古代研究』7、1999）、『聖住寺と朗慧』（書景文化社、2001）所収の各論文（金寿泰「烏含寺」、南東信「聖住寺と無染に関する資料検討」、曹凡煥「朗慧無染の求道行と南宗禪」、金英美「朗慧無染の禪思想」、李喜寛「聖住寺と金陽—聖住寺の経済的基盤に対する一検討—」、趙仁成「朗慧和尚碑銘の撰述と崔致遠」、南東信「聖住寺無染碑の『得難』条に対する考察」（『韓国古代史研究』28、2002）など。
- (6) 本稿で使用する王京人とは、真骨をはじめ、王京に居住し骨品制に参画し得た新羅の特権者集団を指している。ただし、木村誠（「統一新羅の骨品制—新羅華嚴経写経跋文の研究—」（『古代朝鮮の国家と社会』吉川弘文館、2004）が指摘するように、王京に居住する人々の中には、地方から移住してきた人々をはじめ多くの非骨品的階層者を含んでおり、彼等に至っても広義の王京人と呼ぶことができるかもしれないが、ここではそのような意味では使用しない。
- (7) 梁承律「金立之の「聖住寺碑」」は、檀越勢力とみられる上の王族・真骨貴族各人に対して、その経歴等を簡単に言及している。
- (8) 李喜寛「聖住寺と金陽」。聖住寺の創建過程については、曹凡煥「朗慧無染と聖住寺の創建」（『新羅禪宗研究』）に詳しい。
- (9) ここでは、李喜寛「聖住寺と金陽」、梁承律「金立之の「聖住寺碑」」の復元案をもとに論述する。
- (10) 聖住寺に喜捨された稲が、租と観念されている点も注目される。ところで『三国史記』の記載によれば、祿邑制が神文王九年（689）に廃止されると、祿邑に代わって租ないしは月俸が官僚に支給されたことがわかる（浜中昇「新羅村落文書にみえる計畑について」（『朝鮮古代の経済と社会—村落・土地制度史研究—』法政大学出版

- 局、1986)。ゆえに金陽ら王京人が喜捨した租稻というもの、このような性格と関連付けて理解することができるのではないかと考える。なお、高麗時代の租の観念については、浜中昇「高麗田柴科の一考察」（上の本）などが参照される。
- (11) 崔柄憲「新羅下代禪宗九山派の成立—崔致遠の四山碑銘を中心に—」（『韓国史研究』7、1972）及び李純根『新羅末地方勢力の構成に関する研究』（ソウル大学校博士学位論文、1992）、イビョンヒ「三国及び統一新羅期の寺院の田土とその経営」（『国史館論叢』35、1992）、河日植「海印寺田券と妙吉祥塔記」（『歴史と現実』24、1997）などを参照。例えば、聖住寺と比較的近い時期に創建された禪宗寺院である鳳巖寺（慶北開慶に所在）では、『曦陽山鳳巖寺智証大師寂照塔碑』によれば、寺院運営において創建期から土地が最も重要な役割を果たしていることが窺われる（崔柄憲上の論文）。
- (12) 『三国史記』巻44 金仁問伝。この問題については、金寿泰「烏含寺」に詳しい。
- (13) 統一新羅時代の保寧地域は、百済が滅亡したのち、熊川州下の潔城郡新邑と西林郡藍浦のふたつに区分される（朴洋震「保寧地域の自然的・歴史的環境」『聖住寺』忠南大学校博物館叢書第17輯、1998）。
- (14) 戸田芳実「中世成立期の所有と経営について」（『日本領土制成立史の研究』岩波書房、1967）、同「中世成立期の国家と農民」（『初期中世社会の研究』東京大学出版会、1991）。
- (15) 曹凡煥「聖住山門と地方勢力」（『新羅禪宗研究』）。新羅下代の富豪層（富人）の成長及び活動については、李純根「地方富人勢力の成長」（『新羅末地方勢力の構成に関する研究』）、蔡雄錫「新羅下代の社会変動と富豪層の登場」（『高麗時代の国家と地方社会』ソウル大学校出版部、2000）を参照。
- (16) 金周成「張保阜勢力の興亡とその背景」（『韓国上古史学報』24、1997）は、張保阜の勢力範囲について論じている。
- (17) 本稿とは視点が大きく異なるが、曹凡煥「新羅下代張保阜と禪宗」（『STRATEGY21』8号韓国海洋戦略研究所、2001）も、禪宗（聖住山門・聖住寺を含む）と張保阜の関係について言及する。曹凡煥氏は、9世紀中葉の新羅西南海岸部に禪宗が流行し禪宗寺院が建立された背景として、張保阜船団による保護（張保阜が檀越となり彼等を支援）を強調しており、聖住寺開祖の朗慧無染を支援したのも張保阜であったと説く。そうした可能性もなくなは、張保阜が禪僧及び禪宗寺院の支援を行ったとする資料は存在せず、とりわけ張保阜暗殺後に創建される聖住寺においては、張保阜の支援があったとは考え難い。なお、これについての私見は、本文で述べる通りである。
- (18) 蒲生京子「新羅末期の張保阜の台頭と反乱」（『朝鮮史研究会論文集』16、1979）及び、尹炳喜「新羅下代均貞系の王位継承と金陽」（『歴史学報』96、1982）、李基東（近藤浩一訳）「張保阜とその海上王国」（下）（『アジア遊学』27、2001）などが参照される。
- (19) 『三国史記』巻11 文聖王10年（847）条。
- (20) 上の注18の各論文では、金陽と張保阜の関係についても論及している。
- (21) 李基東「張保阜とその海上王国」、金昌謙「8～9世紀新羅政治社会の変化と張保阜」（『対外文物交流研究』海上王張保阜記念事業会、2002）。
- (22) 興徳王9年の教書に対する研究成果は、武田幸男「新羅・興徳王代の色服・車騎・器用・屋舎制—とくに唐制との関連を中心にして—」（『榎博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社、1975）をはじめ、金東洙「新羅憲徳・興徳王代の改革政治—特に興徳王九年に頒布された諸規定の政治的背景に対して—」（『韓国史研究』39、1982）、皆川雅樹「九世紀日本における「唐物」の史的意義」（『専修史学』34、2003）などがある。
- (23) 尹炳喜「新羅下代均貞系の王位継承と金陽」。張保阜暗殺後、金陽は自身の娘を文聖王の妃にするなど、新羅王室との関係を一層強化した。
- (24) 李成市『東アジアの王権と交易』（青木書房、1997）、徐榮教「張保阜の騎兵と西南海岸の牧場」（『震檀学報』94、2002）など。
- (25) それらは、軍事上の重要施設としての役割を担ったことも想起される（李成市『東アジアの王権と交易』）。
- (26) 李炳魯「九世紀初期における「環シナ海貿易圏」の考察—張保阜と対日交易を中心として—」（『神戸大学史学年報』8、1993）、李基東「羅末麗初南中国諸国との交渉」（『歴史学報』155、1997）など。
- (27) 近藤浩一「赤山法花院と平盧軍節度使」（『韓国古代史研究』28、2002）。
- (28) 『巡礼行記』開成4年（839）6月7日条。
- (29) 『巡礼行記』開成5年（840）2月17日条。
- (30) 『巡礼行記』開成4年（839）6月9日条、『巡礼行記』開成5年（840）2月15日条、『巡礼行記』会昌5年（845）7月9日条。
- (31) 金文経「張保阜と法華三寺」（第2回法華寺址学術大会発表要旨文、2000）。
- (32) 鈴木靖民・李成市「9世紀の東アジアと交流」討論（『アジア遊学』26、勉誠出版、2001）。
- (33) 宣帝十四年仲春、副守金彦卿、夙陳弟子之礼、嘗為入室之賓、減清放俸出私財、市鉄二千五百斤、鑄盧舍那仏一休、以莊禪師所居梵宇、教下望水里南等宅、其出金一百六十分、租二千斛、助充裝饒功德、寺諱宣教省、
- (34) 李基東「新羅の金入宅考」（『新羅骨品制社会と花郎徒』一潮閣、1984）。
- (35) 保立道久『黄金王国—東アジアと平安日本—』（青木書店、2004）など。
- (36) 聖住寺の規模の説明は、梁承律「聖住山門関連史料の検討」に詳しい。
- (37) 筆写本によれば、稱とも判読が可能である。
- (38) 李龍範「三国史記にみられるイスラム商人の貿易品」（『李弘植博士回甲紀念韓国史学論叢』、1969）。
- (39) 李基東「張保阜とその海上王国」。また金昌錫「張保阜集團の交易活動と青磁」（『STRATEGY21』8号韓国海洋戦略研究所、2001）は、本文で言及したような新羅国内で発見された越州産の青磁についても、張保阜との関係から説明する。
- (40) 忠南大学校博物館『聖住寺』。
- (41) 朴淳発「土器・磁器」（『聖住寺』）。
- (42) 亀井明德「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」（『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎、1986）、松原弘宣『藤原

- 純友』（吉川弘文館、1999）など。ところで、聖住寺で出土した陶磁器の研究は、報告書刊行後進展していないが、本文で言及した陶磁器の詳細な分析こそが、張保臯暗殺後の対唐交通ならびに、聖住寺（地方）と慶州（王京）間で行われた地域間交流の解明に大きな手がかりになるものと考えられる。
- (43) 曹凡煥「朗慧無染の求道行と南宗禪体得」（『新羅禪宗研究』）。
 - (44) 曹凡煥「朗慧無染と聖住寺の創建」。
 - (45) 不覺遙礼、嘗作東方大菩薩、其三十余年行事也、如是、会昌五年、来帰、（『朗慧和尚碑』）。
 - (46) 山東半島登州で新たに発見された「無染院碑」の記載内容及びその解説は、金文経「張保臯海上王国の人々」（『張保臯海上経営史研究』イジン出版社、1993）に従った。
 - (47) 又鷄林金清押衙、家別樽桑、身来青社、資誼鄭水心向金田、・・・功德主解通五十人等、竟捨珍財、同修真像（『登州府志』の「大唐牟平崑崙山無染院碑」）。この資料は、金文経「張保臯海上王国の人々」からの再引用であるため、改めて検討の機会をもちたい。
 - (48) 李基東「羅末麗初南中国諸国との交渉」。
 - (49) 聖住寺は、新羅国内では聖住山門という禪宗の一大宗派として発達を遂げるのであるが、聖住山門（無染）が海上活動者に共通する宗教として取り入れられたとすれば、これについても新たな検討が必要となる。
 - (50) 上で言及した『聖住寺碑』の中にみられる「家財」とは、例えば『類聚三代格』巻18の「踊貴競売物是非可鞞置弊則家資始就馨・・・」の中にみられる「家資」との関連性を想起してみることができる。それならば、外国の貨物を購入するための資産ということになる。
 - (51) 保立道久『黄金王国一東アジアと平安日本一』。また安祥寺には、日本に往来した唐人からの直接の寄進もあったとする。
 - (52) 田中史生「「帰化」と「流来」と「商賈之輩」（『日本古代国家の民族支配と渡来人』、1997）。
 - (53) 李基東「羅末麗初南中国諸国との交渉」は、特にこの点を強調する。
 - (54) 例えば、藤原純友を「南海賊徒首」（『日本紀略』承平六年六月某日条）と記録することなどが参照される。なお、「海賊」の性格等については、松原弘宣『藤原純友』、西別府元日「平安時代初期の瀬戸内海地域—平安初期の「海賊」問題を中心に—」（『日本古代地域史研究序説』思文閣出版、2003）に詳しく、本稿で使用する「海賊」の意味も、上の論文に依拠する。また、権恵永「新羅下代西・南海の海賊と張保臯の海上活動」（『対外文化交流研究』海上王張保臯記念事業会、2002）は、新羅下代の西南海岸地域で活動した新羅海賊を論じた専論である。
 - (55) 松原弘宣『藤原純友』、西別府元日「平安時代初期の瀬戸内海地域」など。
 - (56) 新羅末、有称ト学士者、自唐来居于此、能剿殺海賊、保聚遺民、智謙其後也、初名砂瑰、興衰玄慶、推戴太祖、為開国功臣、賜本州田三百頃、子孫世食之、
 - (57) 鄭清柱「豪族の台頭」（『新羅末高麗初豪族研究』一潮閣、1996）。ここでは説明を省くが、朴述熙などの海上勢力（豪族）も似たような性格をもつ家門であるという（鄭清柱「王建の成長と勢力形成」上の本）。
 - (58) 山内晋次「九世紀東アジアにおける民衆の移動と交流」（『奈良・平安期のアジアと日本』吉川構文館、2003）。
 - (59) 田中史生「「帰化」と「流来」と「商賈之輩」。
 - (60) 権恵永「新羅下代西・南海の海賊と張保臯の海上活動」。
 - (61) 周知の通り新羅の興輪寺は、大王興輪寺とも称せられ、仏教公認直後に王京内に創建された新羅王室と最も関係がある中心寺院のひとつである。それゆえ、新羅王が辺境部に位置する聖住寺を興輪寺に編入させた理由が興味深い。このことは、西海岸地域での聖住寺の位相を示しているが、王権側からみれば、この措置を通して禪宗寺院（聖住寺）に対して行政的側面からも規制を加えようとしたものと考えられる（崔仁杓「新羅末高麗初禪宗仏教統制—行政的な規制を中心に—」『加羅文化』13、1996）。また直接は関係しないが、鈴木景二「都鄙間交通と在地秩序—奈良・平安初期の仏教を素材として—」（『日本史研究』379、1994）をはじめ日本古代史の研究成果によれば、官大寺僧の交通が当時の中央と地方のつながり（都鄙間交通）を活性化させたとする。なお、この碑文の内容については再稿を期したいと思う。
 - (62) 曹凡煥「聖住山門と新羅王室」（『新羅禪宗研究』）は、当時の新羅王と無染（聖住寺）の関係を中心に、新羅王の聖住寺への関与を具体的に論じている。